

# 堀田正敦博物学の射程

—堀田正敦の『観文禽譜』（九）—

鈴木道男

序 小野蘭山と『観文』三作品  
栗本丹洲と仙台北丹洲『魚蟲譜』  
岩崎灌園と『本草図譜』  
堀田正敦博物学大系の構想と実現 再び栗本丹洲

## 序 小野蘭山と『観文』三作品

堀田正敦（1755 - 1832）の『観文禽譜』は質・量ともに江戸時代を代表する鳥類図鑑である。筆者は『観文禽譜』に基づく『江戸鳥類大図鑑』（堀田著・鈴木編著 2006）において、具体例を挙げずに「正敦にごく近い本草学者たちには、暗黙の棲み分けができており、その業績を総合すると日本博物学大系が成立するように見え、これは正敦の何らかの意図を反映していたことを示唆するように思われるのだが、これは残念ながら現在までは裏付けを欠いた憶測の域を出ないといわざるを得ない」（p.727）と指摘した。本稿執筆の段階においても「正敦の何らかの意図」を明示する史料が発見されているわけではない。しかし実際には、正敦の『観文禽譜』以外の博物学的業績『観文獣譜』と『観文介譜』、栗本丹洲の作である『魚蟲譜』（宮城県図書館蔵本）など、正敦及び幕閣に近い本草学者の主著とその成立の経緯を正敦の『観文禽譜』自序・附言と照らし合わせてつぶさに観察すると、正敦の日本博物学大系作成への意志とその限界をかなり具体的に見て取ることができる。そうして確認できる正敦の構想と企図が及んだ範囲、そして実現したのは奈辺までであったのかを確認することが本稿の目的である。とくに、『観文禽譜』製作の初期の最大のブレンであった、江戸時代最高の本草学者小野蘭山（1729 - 1810）、江戸時代最大の昆虫及び小動物図譜『千蟲譜』を製作した栗本丹洲（1756 - 1834）、飯沼慾斎の『草木図説』とならぶ江戸時代最高の植物図鑑『本草図譜』で名高い岩崎灌園（1786 - 1842）の三人の江戸本草学最盛期を代表する本草家とその主著を中心に、正敦とのかかわりを再確認し、正敦の博物学大系構築の実情を描くこととする。

堀田正敦の博物学的著作には『観文禽譜』、『観文獣譜』及び『観文介譜』が知られている。『観文禽譜』は12冊の鳥の解説書（狭義にはこれのみが『観文禽譜』と呼ばれる場合がある）と、『堀田禽譜』と呼ばれることがある図譜部が表裏一体となって形成されている。『観文獣譜』と『観文介譜』の図譜部というべきものは、長くその存在が確認されていなかった。国立東京博物館所蔵の『博物館図譜』に、『観文獣譜』等相当の図譜が切り貼りされているらしいことは、夙に同博物館に長くおられた佐々木利和先生をはじめとする先学から直接御教示頂いたことであるが、長岡（2001）は、筆跡や内容の多岐にわたる観点から『観文獣譜』（のおそらくすべて）が分解して貼りこまれていることを精密に調べ上げ、事実上『観文獣譜』図譜部（『堀田獣譜』）を再構

築した『博物館図譜』は、明治の博物行政をリードし、現在の東京国立博物館を設立した田中芳男（1838 - 1916）が博物館創立の明治5年から、5年ほどの間に作成したものであるが、結局未完に終わっている<sup>1</sup>。田中は1867年のパリ万博に派遣されたのを皮切りに、多数の万博に出向いたり、出品に関与し、また国内各地に博覧会を多数企画したことから「博覧会男」の異名をもつ。自身も、本草家で東京大学教授をつとめた伊藤圭介の愛弟子であった。『博物館図譜』には江戸時代の様々な優れた博物図譜を分解・再編し、直接これらの図譜に当時の学名<sup>2</sup>等を書き込んだほか、関根雲亭（1804-1877）らの絵師にも図譜を描かせ、それらも江戸時代の図譜由来の博物画と同列に扱って綴じ込んでいる。田中の試みは、明らかに明治期までのわが国の博物画を用い、リンネ以来精密化が進められていた西洋のシステムティックな分類法のもとに、博物図鑑の大系を製作しようとするものであった。但しそれは、江戸時代のすぐれた博物学的業績を分解してしまうという代償のもとに推進されたのである。しかしそれ以前に、『本草綱目』由来の江戸博物学の方法論によって博物図譜の大系製作を試みようとしたのが堀田正敦なのである。そこに収録されるのは、日本の生物を中心に、一部に情報が集中する幕閣のメンバーと幕閣に近い本草学者らが知り得た海外の生物を含む壮大な博物学的データの集積である。

現在財団法人東洋文庫の所蔵となっている『観文介譜』は213品を収録した貝類・軟体動物の解説書である。これと一体をなすべき図譜も、『博物館図譜』中に存在するものと思われるが、確定はなされていない。この『観文介譜』は、筆跡の比較、および「衆芳軒蔵」の原稿箋からして、小野蘭山自身が書き写したものとみられる。正敦自身が執筆した自筆原稿は、残念ながら発見されていない。蘭山の写本が唯一その内容を今に伝えているのみである。東洋文庫蔵の『観文獣譜』は文化4年（1807）蘭山の養子（実の孫）小野蕙畝による筆写である。高齢の蘭山に代わって写したものであろう。「衆芳軒」は京都時代の蘭山が経営していた私塾の名である。国立東京博物館所蔵の蘭山書写の『観文禽譜』および『観文獣譜』との物理的フォーマット等の類似から、これらと一体のものとして制作された写本であると推定できる。構成の緻密さと莫大な記述量からして、完成度が最も高いのは仙台藩旧蔵本をはじめとする『観文禽譜』である。次に『観文獣譜』各写本が位置し、もっとも簡単な、古今の文献からの引用と自らの見解の羅列のように見えるのが『観文介譜』である。ここでこれら三書の具体的比較を提示する余裕はないが、『万葉集』や『夫木和歌集』をはじめとする歌集をはじめ、和漢の古典からの引用と正敦自身の経験を多く盛り込んでいることが、三書に共通する大きな特徴である。すでに陰に陽に指摘されてきたように、これらは間違いなく堀田正敦の一連の博物的著作に連なるものであるとみることができる。

『観文禽譜』と『観文獣譜』には、没後に出版された講義録『本草綱目啓蒙』によって江戸時代最大の本草学者と目され、シーボルトが東洋のリンネとまで呼んだ小野蘭山、江戸におけるその後継者岩崎灌園らが書き写した写本が現存している。『観文禽譜』の正敦自序に「小野蘭山は、もとより本草のことにいたりふかく、かたはら、鳥けたものゝことにも、うとからさりしにより、その教を聞きしもまたおほし」（読点筆者）とあるように、『観文禽譜』は京都で千人の門人を抱えていたという本草学の泰斗との直接の質疑応答によって成った<sup>3</sup>ところが少なくない。そもそも蘭山を京都から江戸に呼び寄せ、新設の医学館で本草を講じさせたのが若年寄堀田正敦であったことは、博物研究の中心が実質的に京から江戸に移ったことを象徴する事実であり、日本博物学史の重要な一齣として知られている。『観文』三作品は、正敦が学者による更なる増補改訂を期したのもでもあろうが、写本を作った学者たちが自筆で書き写したものにさらに綿密な改定を加えた形跡はない<sup>4</sup>。特に蘭山の場合は、自らが協力した作品の、自らのシューレにおける

保存の意味が大きかったのだろう。それに値する作品だからであり、蘭山にも灌園にも、これらを超える鳥獣に関する著書はないからである。本草に限らない、幅広い和漢の古典からの引用と、自らの観察例を鏤めるのは、正敦の独壇場である。筆者はかつて、正敦の周辺には、当代最高の学者たちが集結した陰の大学が存在すると述べた（鈴木 2002）。それは、多数の門人を抱える本草学者たちを指揮し、彼らと対等に切磋琢磨をしていた、まさにこのような正敦の日常から導いた結論なのである。

## 栗本丹洲と仙台本丹洲『魚蟲譜』

宮城県図書館（伊達文庫及び養賢堂文庫）には、仙台藩旧蔵の多数の文献が収蔵されている。その中に、丹洲『魚蟲譜』と呼ばれる卷子本7巻がある。解説文を付した魚類の絵図と、題名と絵のみのものが混在する、いかにも未完成の作品である。

養賢堂文庫および伊達文庫には、堀田正敦が実兄の伊達重村に送付し、その没後は正敦自らが後見管理していた仙台藩にむけて送り続けていた自らの著作物と、自身が積極的に関与した編産物が多数存在する。その中には『水月君自歌合』<sup>5</sup>などの自らの歌集、『観文禽譜』稿本及び図譜部<sup>6</sup>、『厚生新編』の大槻玄沢関与分<sup>7</sup>などがある。栗本丹洲の『魚蟲譜』の非常に図の精度の高い写本もその中に位置する。正敦が事実上製作を命じて、仙台藩の所有に帰したのものには、仙台漂民からの聞き書き『環海異聞』もある。

丹洲が製作した魚類や甲殻類等の図譜の総体は『栗氏魚譜』と総称される。現在は上述の『博物館図譜』その他に分割されており、その全貌は明らかになっていないのだが、『魚蟲譜』はその抜粋にあたる。魚類と爬虫類等が収められており、図の出来栄には多少の優劣があるが、例えばランチュウ等の金魚には金粉で鱗の輝きが表現され、息をのむような美しさである<sup>8</sup>。その第6巻冒頭に、以下の注目すべき記事がある。

蛇 聡名 ヘビ 諸州普く通称トス蝮蛇今云マムシ仙台方言クチハビ蝮蛇東都及ビ京師共ニマムシト呼フ又京師方言ハミ ハメト呼和州方言ハビ 上総房州之方言 クチバミ 土州方言 クツハミ 西国 ヒラクチ 筑前ニテヒラクチト云 ハミハ反鼻ノ音也ヘビト云ルモ同シキ音ナレトモ今ハ諸蛇ノ総名トナシテ呼フトナレル由蘭山モ云リ古昔ヨリクチナハト云フ和訓アレ共後世ニ至テハ唱ルモノナシ按スルニ和名鈔蝮本草疏云蝮蛇蝮一名蜈蚣兼名苑云一名反鼻和名波美俗或呼蛇為反鼻其音片尾是文アルヲ以テ考レハ凡ソ諸蛇ヲ呼テヘビト称呼スルフ其由来久キト思ハル皆コレ反鼻の音轉ナリ 参政堀田侯ノ高説也今コ、ニ此説ヲ挙テ後進ノ疑ヲ解ク 文政癸未夏日栗本瑞見誌

ここには、正敦が自身の博物書に付す、和歌をはじめとする膨大な古典からの引用こそない。しかし、この一文は正敦が鳥類・獣類と軟体動物のみならず、その他の動物に対しても深い造詣を示していることを教えている。引用の最後に付された「参政堀田侯ノ高説也今コ、ニ此説ヲ挙テ後進ノ疑ヲ解ク」以下を除けば、この部分は正敦の他の『観文』諸作品が蛇その他に拡張されたもの、すなわち『観文魚蟲譜』（?）に配されるべき蛇の部分に他ならないようにすらみえる。さらに言えば、正敦は文政6年（1823）までに『観文蛇譜』、あるいは『観文蟲譜』の準備を開始していたことすら窺わせるのである。すなわち、この一文が丹洲の『魚蟲譜』に収められていることを考え合わせれば、『観文魚蟲譜』の構想が、この時点では丹洲との共同作業で、あるいは丹洲に主たる作業を預ける形で、水面下で実現しつつあったのではないかと想定される。その

下敷きとなるべきものが、この丹洲『魚蟲譜』だったのではあるまいか。

シーボルト『江戸参府紀行』(斎藤訳 1967) 1826年4月25日(旧暦文政9年3月19日)によれば、江戸滞在中のシーボルトが「幕府の本草家栗本瑞見(Suigen)はたくさんの植物の絵巻とたいへん多くの日本や支那の魚類・すばらしい甲殻類の画集を私に見せてくれる。<sup>9)</sup>」(p.197)と記しているように、医師・本草家として所持しているのがむしろ当然であるべき植物図譜のほかに、丹洲は『魚蟲譜』の母体に相当すると思われるもの、即ち『栗氏魚譜』と通称されるもののなかから、魚類と甲殻類の図譜をシーボルトに閲覧させているのである。水棲生物研究、そしてその成果である魚譜に対する丹洲の強い自信が窺われるのだが、シーボルトと丹洲との会談には別の意味もあった。丹洲は正敦の意を受けて、正敦自身の博物学的な質問を携えてシーボルトと接していたのである。それを示す資料は『観文禽譜』にある。『観文禽譜』図譜部「水禽下」の「ペンギン」の項には、シーボルト来日前の文政4年(1821)に、別のオランダ人が持参したペンギンの皮について、正敦が長崎のオランダ人に問い合わせ、南海に住む水鳥であることなどの返答を得たことが述べられており、さらに丹洲の一文が収録されている。そこにはペンギンの頭皮をシーボルトに示して詳細を質問した丹洲に対して、シーボルトが蔵書をもとに説明し、長崎に戻ってから別の蔵書を丹洲に送る約束をする仔細が述べられている。ちなみに正敦が興味を持ったペンギンの皮とは、「紅毛のカピタン」<sup>10)</sup>が同じ1821年春に長崎奉行筒井和泉守政憲に贈った、キングペンギンの喉の皮を加工した財布様の袋である。

『観文禽譜』本文「寅 水禽下」の「ペンギン」には「文政九年三月江戸エ来ル蘭人ノ外科シイボルトニ栗本氏ヲシテ問シム…(中略)…此鳥喙欄ピングイン羅甸ニアプテイノデイテスト称ス北海の人跡絶タル島上ニ産ス俗ニゼーホーゲルトイヘルハ海鳥ノ義ニテ本名ニアラズ」との件が見られる。これは、シーボルト訪問の際、明らかに正敦の意を受けてシーボルトにペンギンについて質問せしめたことを明らかにしている。

しかしシーボルトはおそらく、ペンギンを北極海のウミスズメ科の大型の絶滅鳥オオウミガラスと誤解した、当時ヨーロッパになお流布していた旧説を支持していた。そのため結局正敦は、このオランダ人の説は詳悉なものではないと結論するに至る<sup>11)</sup>。

シーボルトは江戸参府の道すがら、大森で薩摩藩主を退任していた島津重豪の歓待を受けている<sup>12)</sup>ほか、名古屋で菅百社の面々、江戸でも様々な蘭学者と本草家の訪問を受けた。しかし幕府の中核にある人物が、非公式であってもシーボルトと直接面談することは不可能であった。直接面談しても差障りのない丹洲が正敦に代わってシーボルトに質問を投げかけたのだが、正敦がこの私的な役を任せるほど、両名の関係が親密であったことが図らずも窺われるのである。

『観文禽譜』本文には多数登場するものの、図譜部に於いて丹洲が顔を出す回数は意外に少なく、十指に満たない。それは、『観文禽譜』の骨格が既に完成してから丹洲と正敦の交流が深まったからであり、魚類や小動物(蟲)を得意とする丹洲の主たる関心が、取り分けて鳥には向けられていなかったからであると推察される。ペンギンの他には、同じく晩年新たに正敦の視野に入った海外の鳥「突厥雀」(日本でも稀にみられるサケイ)などの他に、丹洲は「ひばり」や「タクミドリノ巢」(エナガの巢)、深山三光(珍鳥オオカラモズ)に蔵図を提供している。その他、同じく『観文禽譜』に収録された蘭方の奥医師桂川甫賢の「鷓鴣写真説」の文中にこの鳥の同定に関する重要人物として丹洲が登場する<sup>13)</sup>。日本では珍鳥であるヒゲガラを論じたこの甫賢の説も、シーボルトが持参したこの鳥の剥製の優秀さから考察が始まっているのである。

重要なのは、『観文禽譜』に、年齢が近い正敦と丹洲が、動物に関して同じ対象をもとに意見

交換を行っていたことが具体的に記録されている点である。丹洲は、完成しつつある『観文禽譜』などから、正敦の本草研究の実力を肌で感じていたであろうし、正敦は、蘭山亡き後、博物研究の顧問として丹洲に勝る人物を見出し難かったであろう。

現存する『観文禽譜』、『観文獣譜』、『観文介譜』は、いずれも正敦自身が資料を収集し、自らが執筆していることは明らかであるが、実は40年を経て完成した『観文禽譜』仙台本には、正敦晩年の頃著された丹洲や桂川甫賢などの文章が署名入りでそのまま抜粋されている部分が見られる。また、最終稿である仙台本は、正敦が仙台藩から自らのもとに引き抜いた桜田欽斎<sup>14</sup>、河野杏庵のような、仙台と江戸を往復した本草に詳しい伊達藩学者たちが参加して仕上げを行っている。本稿終節で述べるように、晩年の正敦は、自らが企画した博物書のシリーズを、すべて自らの手で仕上げるという意図を放棄している。そしてむしろ、様々な学者の共同作業によって完成させようとする意図が明らかに存在した。もとより学者支配の任務を含む幕府の若年寄としての正敦には、『寛成重修諸家譜』などの企画と編纂を「総裁」をし、また多くの学者が動員された寛成の改暦を指揮し、さらには老中退休後の松平定信が運営した学術の薫り高い「浴恩園」サロンで和歌を競作し、さまざまな著作を共同で作成した経験がある。

魚に関する博物の分野に正敦が深く手を染めていた直接の証拠はない。しかしこの丹洲『魚蟲譜』には、正敦が時折顔を見せている。第七巻の「竜骨」（古代ゾウの臼歯の化石）には、丹洲が漢文で記した

右龍骨及齒是或家珍藏也往歲排列於医学館藥品会其品中有齧骨者此特稀世物予觀而奇之即假作其図今茲探篋底得此図乃再写設色以備 堅田侯之一覽只恐不得彷彿于其真耳

文政己卯初秋澁日栗本瑞見源昌臧謹誌

がある。堅田侯堀田正敦の高覧を拝するために、実物を模写していた後、深くしまい込んでいた化石ゾウの臼歯の図を彩色で敷き写したのが文政己卯、すなわち1819年のことであることがわかる。また正敦の関心が化石生物にまで及んでいることを示しており、正敦が丹洲とともにこうした珍品やその図を愛でて楽しんでいた姿が髣髴とされる。さらに、『魚蟲譜』の、亀類と河童類を収めた第二巻の「緑毛亀 濃州産」にみられる「寛政十一巳未夏蘭山所携来」は、明らかに、この年正敦の招聘によって京都を出て、江戸の医学館で本草を講じることとなった蘭山が、正敦に直接土産として持参したものと思われる。文中で蘭山に敬称を付しておらず、従って蘭山よりも身分が高い人物の文章であると推定できることからして、丹洲ではなく正敦本人が付した一文であろうと考えられるのである。また、『魚蟲譜』の母体となった『栗氏魚譜』には正敦自身の蔵図も収録されている<sup>15</sup>。丹洲の解説文と手写（写生）は文政2年から同7年（1819-1824）までの年を記したものが多い。

『魚蟲譜』は、確かに栗本丹洲の著作である。しかしこれが完成された作品であると断定するには若干の躊躇を抱かざるを得ない。栗本丹洲の著作であるのは確かであるとされているにもかかわらず、魚の図の中にはことさらに「栗本瑞見法眼蔵図」との断り書きが付されたものが多数ある。第一巻の最初の例を見ると、「タカベ」には「庚辰晩秋既望月日本橋南魚肆求之 此魚一荷ニ数百枚アリ予始テ是ヲ看珍シキモノト思ヒテ写真シ煮食フ味美也多作鱸タカヘヒモノトス」との解説文があるのだが、この魚屋で魚を求めて珍しいと思って写生し、煮て食べた人物は丹洲本人でありこそすれ、幕府の若年寄堀田正敦であるとは考えられない。にもかかわらず、「栗本

瑞見法眼蔵図」とあえて断ってあるのは奇異なことである。同じ巻の中にある「ウツワ」には、「又云ウツカツオ此即メジカノ類也背上より尾ニ至ル処ニ雲紋アリ因テ雲図ト云ル意ノ由東魚誌ニ見ヘタリ」の説明文があるが、そこには「栗本瑞見誌」とある。

即ち、『魚蟲譜』は、丹洲の解説文が主体だが、正敦の文も丹洲の文も一旦客体化し、第三者がそれを完成することを期したものであるとみられるのである。そしてこの構造からしてあらたな『魚蟲譜』(?)へと再編されるべく準備されたものとみることができる。すでに引いた『魚蟲譜』第6巻「蛇」の項の正敦の解説文の末尾に「参政堀田侯ノ高説也今コ、ニ此説ヲ挙テ後進ノ疑ヲ解ク 文政癸未夏日栗本瑞見誌」とあることは、正敦が主体となって『観文魚蟲譜』の形態に仕上げることを断念し、多数の学者の共同作業でこれを完成させようとしていたことを示すものであろうと考えられる。この未完成の『魚蟲譜』が仙台藩に送られていた<sup>16</sup>ことは、『観文禽譜』を最終的に校訂して完成させた仙台藩の本草学者たちに、この図譜に解説文を加えさせ、近い将来『観文禽譜』と同じ水準の『観文魚蟲譜』として完成させようとしていたことを教えているのではあるまいか。仙台本(稿本)『観文禽譜』附言の末尾は「若き程いとまある折の手ずさひに筆をとりつるが、後ことしげき身となりぬれば、かひつどひしまゝにてすて置つ。年経てこの頃、ふばこの中に有しをとり出て見るに、爰かしこあやまりおほく、これかれ出もらせる事もすくなからず、ふたゝび校正をへざれば全本となしがたし。しかはあれど、つねにおほやけ私暇なきのみならず、齢もいたくかたふきれば、かゝる事に心をつくさんものうく、たゝ折見るまにへ再訂し、まだしき所は又、心しらん人におほせんとて、さし置ぬされば、はしめ終り同じからず。烏焉馬のたぐひもおほかるべし」(句読点筆者)と閉じられる。政務に疲れ果てた正敦の筆跡は、晩年脳に障害を受けたかのように著しく変わる。自ら本草に取り組もうとしても物憂く、「心しらん人」に再訂を任せようというのである。想定される『観文魚蟲譜』の完成もこの延長線上にあったに違いない。

仙台藩はしかし、正敦の死の翌年から4年間にもわたる天保の大飢饉に見舞われた。本草学者たちには救荒のための書こそ求められはすれども、「不用不急の学」に勤しむ余裕はもはやあり得なかった。

## 岩崎灌園と『本草図譜』

『観文禽譜』自序冒頭にある「萬のこゝと、ふみにしるし、絵にかくはかり長くつたふへきはなし」(読点筆者)という認識を植物以外の分野全体に押し広げようとする試みが『観文禽譜』、『観文獸譜』、『観文介譜』であったとすれば、正敦が『観文禽譜』附言で「草木のことはかのいたり深き人ゝにゆづりていはず」と述べた植物の分野について言えば、「いたり深き人ゝ」とは具体的には、正敦の本草分野の実質的な師である小野蘭山であり、同好の士である栗本丹洲であり、そして蘭山の若い後継者と目されていた岩崎灌園といわなければならない。薬園を与えるなど正敦がパトロンとして後見していた灌園の名著『本草図譜』は植物が主体であり、『本草綱目』由来の図譜のない「服帛類器物類」の部分が若干巻図譜なしで付されているのみである。実はこの彩色の豪華な植物図譜こそ、正敦が「ゆづりていはず」なかったものの、彼の構想の中で「ふみにしるし、絵にかくはかり長くつたふへきはなし」のライトモチーフに基づいて「萬のこゝと」すなわち神羅万象を命名記載しつくそうという、洋の東西を問わない博物学の基本原理が、植物の分野に及ぼされたものであろうと考えられるのである。この図譜には、その名の通り非常に切り詰め

た記述文が付されているのみの、図中心の構成になっている。これにもいずれは正敦の集めた和歌をはじめとする古典の引用が付されて「観文」の名を付した、莫大な量の古今の文献を収録する博物書のシリーズの一部をなそうという暗黙の意図が込められていたからではなからうか。

岩崎灌園（1786 - 1842）は幕臣であり、秀才の誉れ高く、文化6年（1809）小幡次郎八組御徒見習として出仕した年、小野蘭山に入門を許される。しかし蘭山はその数か月後に他界するのだが、その後は正敦が灌園を引き立てることとなる。まず屋代弘賢が天明年間に私的に編集を開始した日本初の類書『古今要覧』<sup>17</sup>が文化7年（1810）幕府の官撰となると、その本草分野の執筆と図画の作成の任に当たらせることとなる。

佐々木（1985）は、文政元年（1818）10月28日に、正敦が灌園に自著『本草図説』60巻を幕府に差し出すように命じ、灌園はそれを11月1日に提出、幕閣の若年寄・老中がそれを閲覧して文政4年5月1日に灌園に返却されたこと<sup>18</sup>を初めて明らかにした。そして佐々木はこれが契機となって灌園の著『本草図譜』が作成され、さらに文政3年（1820）2月、灌園に薬園が貸与されてたと述べている。『本草図説』は全60巻76だが、7冊が失われている。石類の1巻1冊、動物類の6巻6冊の他は植物に充てられた、解説文のない図譜の集積である。東京国立博物館には、一般に知られた『本草図説』のほかに、もう一種の『本草図説』のマニュスクリプトがあり、それは『本草図説』の雑録とも補遺ともみられる。興味深いのは、その第1・第2冊の石類に続く、草本を中心とする第3冊<sup>19</sup>に、「蝦夷方言」と断られたもの、あるいはアイヌ語と思われる名が付された図が散見されることである。詳細は別稿で論じたい。『本草図説』は自序の文化7年の自序のころには、『本草綱目』の枠組みに従って配列がなされ、骨格が固まっていたであろう。一方正敦が蝦夷地の巡察に赴いたのは文化4年のことである。寛政の改革以来、学者らによる蝦夷地の探検を制限しており、蝦夷地に関する調査に赴きうるのは事実上、学者支配を任務とする若年寄堀田正敦が指揮する学者に限られていた（この事情に関しては鈴木2000参照）。そして幕閣にあって蝦夷地の情報に最も通じているのは正敦であった。『観文禽譜』に、他の本草学者の図譜には見られない蝦夷地の鳥の情報が鏤められているのはそのためである。この補遺も、正敦の蝦夷情報収集が進んだという事情のもと、灌園に情報が渡されて成立したのであろう。

この『本草図説』が発展的に増強されて、大半の図譜をこの書をもととして解説文を付し、植物分野を中心として完成したのが『本草図譜』96巻である。この書は『本草綱目』に連なる最高最善の植物図譜であり、約2000品を収録している。灌園に研究の機会と場を与え続けているのが堀田正敦であるにもかかわらず、『本草綱目』の「水部」、「火部」、「土部」、「金石部」に相当する巻を飛ばして最初に出た第5巻に付された『本草図譜』の喜多村直の叙にも、灌園の長い自序にも、正敦の名は現れない。しかしこれは正敦と灌園の身分の隔たりを示しこそすれ、両者の関係の深さを否定するものではない。また、『本草図譜』の中には、蝦夷地およびロシア産を明示した植物が収録されているが、その数は7種<sup>20</sup>に過ぎない。ただしいずれも栽培した上での観察によると思われる、匂い等まで含めた記述文が付されている。上述の『本草図説』補遺3巻掲載のもので、種子を得て栽培に成功したもの等であろうと思われる。これらが『本草図譜』刊行の前期のみ集中していることはやはり、正敦の蝦夷地巡察の後の、関心が蝦夷地に向いていた時期との重なりを示唆する。

簡単な解説を付したのみであっても、優れた図に満ちた博物図譜に正敦一流の古典からの幅広い引用を加えれば、あるいは『観文草木譜』が成ったかもしれないが、正敦は『観文禽譜』附言の「草木のことは、かのいたり深き人々にゆづりていはず」という原則を遵守した。その代り、

彼は灌園を引き立て、江戸の本草学的博物学が生んだ最高傑作の製作を補助した。その代価であるかのように、『本草図説』全60巻の内58巻が植物に充てられ、『本草図譜』は植物部分のみが完成されたのである。本人の意向はともかく、結局本草家灌園の代表作は、「灌園は主に草木をせよ」という正敦の命令があったかのような内容となった。「岩崎」印が岩崎家の旧蔵書であることを示す書が東京国立博物館に多数存在するが、その中には『観文禽譜』と『観文獣譜』がある。当然その水準は灌園の熟知するところであったから、仮に灌園が植物以外の研究を進めようとした場合のプレッシャーになったことだろう。

ちなみに『本草図譜』は文政11年(1828)に「完成」し、正敦が没する2年前から刊本版の刊行が開始され、灌園没(1842)後の弘化元年(1844)に完成したのだが、刊行には資金面の困難が伴った。当時の西洋の博物図譜のように予約出版の形態をとり、サブスクリプターを募って刊行にこぎつけていたのである。正敦の没後、灌園のパトロンとなる人物は現れなかった。

### 堀田正敦博物学の構想と実現 再び栗本丹洲

既に一部を引いたが、『観文禽譜』の雅文の自序冒頭に「萬のこゝと、ふみにしるし、絵にかくはかり長くつたふへきはなし。我國のいにしへはさらなり。もろこしのひしりの御代のありさまも、ふみにしるし絵にかきたればこそ、今の世にも残りつれ、たゞにいひつき、かたりつかむにいかてか永くつたふへきや。されはおほやけにまれわたくしにまれ、みやひたること、はかなきわざにても、すこしかとあるかきりは、うつしえとなし、それがことよりはしるして、わか子むまこにつたへむと思へり。この観文禽譜も其中のものなるが」(句読点筆者)云々とある。

同じ『観文禽譜』の附言において、正敦は「つゝめでを立ることは本草綱目の例にならひ、水原林山の四つをもて門をわかつといへども、同じたぐひなるをべちに出しては、其図をならべ見るに便よからざるにより、綱目の例にたがへるもあり。たとへば、鴿は綱目原禽におさめ、鳩は林禽に入といへども、いへばとやまばと、ともに同じたぐひなれば、合せて林禽に入たり。この類猶多し。」(句読点筆者)と述べ、分類体系の原理の基本を『本草綱目』におきつつも、細部において独自の改良を試みる方針を明らかにしている。

『本草綱目』に分類体系の大局的な基本を依拠し、それに改良を加えるというのは、江戸の本草学的博物学の常道であり、正敦もあえてそこから外れることはしていない。したがって、鳥や獣に限らず、正敦の博物学的理解の全体的な枠組みは『本草綱目』に従っているとみることができる。そのうち、本草学の中核をなす植物の分野に関しては、おなじく『観文禽譜』の附言に「昔より、本草にいたりふかき人々のあらはせしふみをみるに、草木のことはいとつばらかなれど、鳥けだものに到りては、をろそかなるものおほかりけれ。其等の疎かなるにあらず。萬のくさ木は、近き野山をたづぬればともめ易く、千々の鳥けだものは、しらぬせかいのものおほくして、常に見難ければ也。されば李東璧が本草の中にも、国々の人のいひならはせしまゝを載て、さだかならぬもの省故に、草木のことはかのいたり深き人々にゆづりていはず。唯鳥けものゝたぐひ、見もし聞もし、えにかきふみに載たるをあつめてしかせしなり」(句読点筆者)とある通り、すでに研究が進んでいる草木は本草家に任せておき、必ずしも研究が進んでいない「鳥けものゝたぐひ」に自ら手を染めようという方針が明確に提示されている。

ちなみに『本草綱目』全52巻のうち、半数の26巻が植物に割り当てられているが、それ以外には序例2巻、百病主治2巻と無生物を扱う水2巻、火1巻、土1巻、金石5巻、服器2巻の計



15巻がある。そして全巻の最後にヒトの各部や分泌物、木乃伊までを薬として扱った人1巻がある。これら以外の、小型動物全般を扱う蟲四巻、鱗を持つ爬虫類などを扱う鱗二巻、鱗のない亀の類と貝を扱った介二巻、禽三巻、獸二巻の計一三巻が、正敦が自らの課題とした「鳥けものゝたぐひ」の範疇に対応する部分であると考えられる（別表参照）。

江戸時代最大の虫類<sup>21</sup>図譜といわれる丹洲の『千蟲譜』<sup>22</sup>の「海老同穴」の項目には、「…此モノ文政壬午秋参政堀田侯恵贈セラルモノナリ」の一文がある。この『千蟲譜』には、多数の著書からの長い引用があるから、丹洲自身の解説でも長文にわたるものには署名が付してある。この年文政5年（1822）は、正敦と丹洲の博物研究上の交流が佳境に入っていた頃だと推定できる。そして『千蟲譜』が一応の完成に達し、自序が付された文化8年（1811）からは11年を経ている。丹洲自序には、その段階で既に『千蟲譜』に18年を費やしていることが述べられている。この書も、40年を経て完成した『観文禽譜』同様極めて長い年月を経ており、丹洲がライフワークとしていたものの一つなのである。

管見では、現在伝わっているいくつかの『千蟲譜』写本に正敦が登場するのは、この一か所のみであると思われる。『千蟲譜』は、魚以外の、昆虫から爬虫類に至る、主として小動物から、当時は実在が疑われていなかった所謂「河童」までを収録している。当代の様々な学者たちの著作を引用しているほか、丹洲自らも多数の解説文を付しており、虫類の項目数においては江戸時代最大と思われる図譜だが、正敦が提供したものはこの一品のみであろう。昆虫に関しては何らの図譜ないし標本も提供していない。

『本草綱目』の分類に従えば、虫類には、ヘビやカメのほかに、当然昆虫その他の陸生の節足動物が入ることになる。『千蟲譜』にもこれに応じて生物が収録されている。今のところ、正敦の収集したものの中に昆虫の図譜ないし情報があつたのか否かについて、結論がましいことが言える段階ではない。しかしおそらくはコレクションがあつたとしても少数なのではあるまいか。仙台伊達家には、昆虫を含む千に迫る数の図譜のコレクションがあつたことが推定されており<sup>23</sup>、正敦自身が敷き写しによってそれらを利用することは可能であり、事実『観文禽譜』には「仙台侯蔵図」が散見される。しかし、正敦が昆虫の敷き写しをさせた形跡はみあたらない。珍品の絵図を持っていれば、むしろ進んで丹洲に提供したであろう。この状況が、仙台伊達家とのいわば棲み分けを意図したものではないことは、『観文禽譜』に含まれる多数の「仙台侯蔵図」の存在からして明らかである。これが、本来正敦が昆虫嫌悪やアラクノフォビアを持っていたためか、あるいはこれらが博物大系作成の際の登録順位が低いものと考えていたことによるのかは不明である。後者はしかし、本草綱目の配列に倣ってミツバチやカイコガなど、人間の生産活動に有用な昆虫から説き始め、かつその利用に多くの紙数を割いた『千蟲譜』を前にしては考えにくい。

正敦が協力した『千蟲譜』が、同志丹洲によって高い水準に達したのを、材料を提供した正敦は確認している。『観文禽譜』自序の「草木のことはかのいたり深き人ゝにゆづりていはず。唯鳥けものゝたぐひ、見もし聞もし、えにかきふみに載たるをあつめてしかせしなり」と述べて、植物分野での灌園の『本草図譜』に対する姿勢と同様、昆虫やその他の陸生節足動物研究も、丹洲に任せただとみるべきであろう。このように考えたとき、堀田正敦自身および正敦が関与した博物書は以下のようにまとめることができる。

正敦がほぼ完成させたもの： 『観文禽譜』  
製作途中というべきもの： 『観文獸譜』

【観文介譜】

製作を仙台藩の学者に託したもの： 栗本丹洲『魚蟲譜』（『観文魚蟲譜』？）  
制作に協力したもの： 栗本丹洲『千蟲譜』  
制作者を援助したもの： 岩崎灌園『本草図譜』  
製作する意思がなかった分野： （岩石）鉱物、天水等  
薬物としての人、人の分泌物など  
『本草綱目』の「雑木部」相当部分  
そのうち後に血縁者が製作したもの： 土井利位（鷹見泉石）『雪華図説』 正統

最後に、『本草綱目』の文献一覧等を除く分類体系の内、正敦が博物書を製作する意図を示さなかった分野に触れる。岩石鉱物は、リンネ以来西洋博物学が自然界を動物界・植物界・鉱物界に分類しているように、動植物以外の無生物を広く包含する概念であり、これも、自然物全体への命名・記載と体系化を目的とする博物学の研究対象とされてきた。西洋では19世紀初頭に博物学から方法論的に生物学が分化してからは、記載鉱物学として独立し、物理学の方法論の援用を俟って徐々に近代科学の鉱物学となっていったが、それは生物諸学よりもやや遅れた感がある。鉱物学は1920年ごろ、結晶学の成立により分析的な科学の一員となったとみることができる。江戸時代の本草学的博物学の中の岩石鉱物の分野には、木内石亭の『雲根志』<sup>24</sup>のような代表的著作があり、様々な石の産地、木版単色の絵図、来歴を示した。しかし『雲根志』が「靈異類」から始まるように、当時の日本では、この分野には学問的分類が樹立されてはおらず、化石や鉱物、形状が特異なものなどが雑多に並べられた印象は否めない。江戸時代の日本でも、この分野で生物ほど研究が進んでいたとは言えないのである。金石に関しては浴恩園サロンの古物趣味がなさしめた『集古十種』が名石を論ずるような場合を除いて、正敦とその周辺で、灌園らの学者以外が金石等を論じた形跡はない。例外的に若い岩崎灌園が『本草図説』に「石部」を設けて彩色で諸石を掲載しているが、『本草綱目』に従ったその配列は到底システムティックなものではない。但し、正敦の実の甥である老中土井利位が、家老の蘭学者鷹見泉石のたすけを得て正統『雪華図説』を著していることには刮目すべきであろう。『本草綱目』の実質的に最初の巻の内容に相当するものが利位によって正敦周辺の幕閣のメンバーから生み出されているのである<sup>25</sup>。

『本草綱目』は、自然物の網羅的命名記載をめざす博物学の要素を多分に含むが、薬学的観点からも疑問が多かるうが、器物を薬用とする方法を説く「器部」が、博物学と相いれないのは当然である。それでも灌園の『本草図譜』には、図はないもののこれに相当する部分がある。同様に「雑木部」の内容である「城東腐木」や「古厠木」等も、人工物であって、薬学の対象とはなっても、上述の「人部」と同様、博物学の対象外である。以上から、『本草綱目』が絶対的権威であった当時の本草学的博物学が、主たる関心の対象とした自然界の、とくに生物に関しては、正敦と彼が関与した江戸博物学を代表する諸作品はその大半をカバーしているということが出来る。『本草綱目』が扱わなかった粘菌などの分野に正敦の目が向いていないのは、当時の学問の枠組みによる限界とみるべきである。そして別表を眺めると、正敦とその周辺の学者たちがカバーしようとした分野は、『本草綱目』が説明しつくそうとした範囲よりも、リンネに発する当時の西洋博物学が対象としていた範囲に近いことがわかり、興味深い。

## 別表『本草綱目』総目とそれに対応する正敦及び正敦関連者の博物学的業績

第一卷	序例上	対応物なし（博物学の範疇外）
第二卷	序例下	対応物なし（博物学の範疇外）
第三卷	百病主治薬上	対応物なし（博物学の範疇外）
第四卷	百病主治薬下	対応物なし（博物学の範疇外）
第五卷	水部二類 水一 水二	（『雪華図説』）
第六	火部一類 火一	対応物なし（博物学の範疇外）
第七卷	土部一類 土一	対応物なし（博物学の範疇外）
第八卷	金石部五類 金石一 石二	（灌園『本草図説』）
第九卷	石三	（灌園『本草図説』）
第十卷	石四	同上
第十一卷	石五	同上
第十二卷	草部十一類 草一	『本草図譜』山草部
第十三卷	草二	同上
第十四卷	草三	『本草図譜』芳草部
第十五卷	草四	『本草図譜』湿草部
第十六卷	草五	同上
第十七卷	草六上下	『本草図譜』毒草部
第十八卷	草七上下	『本草図譜』蔓草部
第十九卷	草八	『本草図譜』水草部
第廿卷	草九	『本草図譜』石草部
第廿一卷	草十	草十一 海苔など 『本草図譜』水草部
第廿二卷	穀部四類 穀一	『本草図譜』穀部
第廿三卷	穀二	同上
第廿四卷	穀三	同上
第廿五卷	穀四	同上
第廿六卷	菜部五類 菜一	『本草図譜』菜部
第廿七卷	菜二	同上
第廿八卷	菜三 菜四 菜五	同上
第廿九卷	果部六類 果一	『本草図譜』果部
第三十卷	果二	同上
第三十一卷	果三	同上
第三十二卷	果四	同上
第三十三卷	果五	同上
第三十四卷	木部六類 木一	『本草図譜』香木部
第三十五卷	木二	『本草図譜』喬木部
第三十六卷	木三（灌木）	『本草図譜』灌木部
第三十七卷	木四（寓木）	『本草図譜』寓木部
	木五（苞木）	『本草図譜』苞木部
	木六（雑木）	対応物なし（博物学の範疇外）
第三十八卷	器部二類 服器一 服帛二	（『本草図譜』）
第三十九卷	虫部四類 虫一	『千蟲譜』
第四十卷	虫二	同上
第四十一卷	虫三	同上
第四十二卷	虫四	同上
第四十三卷	鱗部四類 鱗一	丹洲『魚蟲譜』第六卷
第四十四卷	鱗三	同上

第四十五卷	介部二類 介一	『観文介譜』
第四十六卷	介二（蚌蛤類）	丹洲『魚蟲譜』第七卷、『千蟲譜』
第四十七卷	部四類 禽一	『観文禽譜』水禽部
第四十八卷	禽二	同上 原禽部
第四十九卷	禽三 禽四	同上 林禽部、山禽部
第五十卷	獸部四類 獸一	『観文獸譜』
第五十一卷	獸二 獸三 獸四	同上、一部『千蟲譜』
第五十二卷	人部一類 人一	対応物なし（博物学の範疇外）

## 文 献

- 磯野直秀（2012）『日本博物誌総合年表』（総合年表編、索引資料編）、平凡社
- 岩崎灌園『本草図説』の添付紙片 東京国立博物館蔵
- 岩崎灌園『本草図説』（目録及び補遺）東京国立博物館蔵
- 内山淳一（1995）『仙台市博物館調査研究報告』第14号 p.64-76
- 木内石亭（1773-1801）『雲根志』前編・後編・三編（東北大学狩野文庫蔵）
- 桜田欽斎「鼓缶子年譜」、『仙台叢書』第7巻（1924）、p.443-449
- 佐々木利和（1985）「博物館書目誌稿；帝室本之部博物書篇」、『東京国立博物館紀要』21号
- Ph. シーボルト・斎藤信訳（1967）『江戸参府紀行』平凡社東洋文庫 87（原著 1897）
- 鈴木道男（1994）「江戸鳥学の到達点—桂川甫賢『鶴鶴写真説』の周辺 堀田正敦の『観文禽譜』（二）、東北大学言語文化部『言語と文化』第2号
- 鈴木道男（1996）「翻刻 宮城県図書館蔵『水月君自歌合』、東北大学言語文化部『言語と文化』第4号
- 鈴木道男（1997）「『雪華圖説』再考」、東北大学大学院国際文化研究科『国際文化論集』第5号
- 鈴木道男（2000）「若年寄の蝦夷地視察 堀田正敦の『観文禽譜』（六）」、東北大学大学院国際文化研究科『国際文化論集』第8号
- 鈴木道男（2002）「江戸後期探検博物学の体制的位置づけ 堀田正敦の『観文禽譜』（七）」、東北大学大学院国際文化研究科『国際文化論集』第10号
- 長岡由美子（2001）「堀田正敦の獣譜〈博物館図譜〉と解体された幻の図譜」Museum No.571,71 ÷ 99 東京国立博物館
- 栗本丹洲『魚蟲譜』宮城県図書館蔵
- 栗本丹洲著・小西泰正解説『千蟲譜』江戸科学古典叢書 41、恒和出版
- 平賀鳩溪（1763刊）『物類品陶』
- 福島好和（1978）「栗本丹洲と魚譜（一）—丹洲の生涯とその研究—」関西学院大学『人文論究』28（3）p.1-23
- 林純子（1995）「東京国立博物館保管『観文禽譜』について」、『紀尾井史学』第14号 p.55-62
- 堀田正敦著・鈴木道男編著（2006）『江戸鳥類大図鑑』、平凡社
- 矢部一郎（1994）「岩崎灌園」、平凡社『江戸博物学集成』所収 p.280-292

## 注

- 1 例えば、東京国立博物館所蔵の『観文禽譜』の図譜部（『堀田禽譜』には、『観文禽譜』として残されたものと、切り抜かれて博物館図譜』の一部とされたものが混在していることからこれが推定できる。
- 2 例えば、『観文禽譜』図譜部由来の「いぬがん」（シジュウカラガン）の図には、現在の *Branta canadensis* ではなく、当時通用していた *Anser canadensis* の学名が書き込まれている。
- 3 鈴木（2002）p.138 参照。
- 4 例外は朱と藍で訂正を加えた『観文禽譜』と『観文獣譜』の狩谷掖斎本だが、これは校訂と呼ぶには足りない字句の訂正である。『観文獣譜』について長岡（2000）は、成立の順を「①ある時期に（『観文禽譜』の初期

- バージョンと同じく完成6年頃か)『観文獣譜』の大元の原文が作成され、数人の筆でいったん浄書された。②水月本はこれをこれを原稿として薄墨や朱墨で著者自身による追加、校正を受け、③その構成部分を含めてそっくり狩谷本、岩崎本に筆写された。④さらにその後、文化年間を通じて水月本にのみ同じ筆者によって幾度かの再改訂がくわえらえた」としている。『観文禽譜』にはさらに多くの写本があるが、蘭山本、岩崎灌園本との関係では事情は同一であろう。水月本は、水月と号した正敦自身の蔵書である。
- 5 鈴木(1996)翻刻参照。
  - 6 仙台北『観文禽譜』図譜部には、折本の形態のもの他に、原禽と山禽の三巻が卷子本となっている。その卷子本とよく似た灰色の標のものがある。
  - 7 『厚生新編』は幕府の非公開編産物であるためか、仙台藩蔵本は『生計纂要』と題名が変えられている。玄沢は正敦の外交政策の顧問であり、正敦の許可または指示のもと、本書は仙台藩に送付されたのだろう。
  - 8 ただし、極めて美しい金魚の図であっても、『博物館魚譜』収録の図とは違い、前鼻孔と後鼻孔の間にある整流のための仕切り板が描かれていないことなどから、『魚蟲譜』が同時に作られた正本ではなく、写しであると断定できる。
  - 9 シーボルトの『ファウナ・ジャポニカ』に、丹洲がこの面会の後にシーボルトに贈った図が使われている(福島1978 p.12-15参照)。これは丹洲の魚譜、即ち博物館魚譜やそこからの抜粋とみられる『魚蟲譜』の魚類部分に相当すると思われるが、現段階では具体的に特定できていない。磯野(2012)は「『蟹蝦類写真』と『魚類写真』は丹洲の通称『栗氏魚譜』を絵師に模写させたものらしい(p.507)」と推定している。また磯野は、この魚譜は「自筆本が分散している上、切り抜かれて…『博物館図譜』に貼付されている図も多く、全体像は明確ではないが、推定では全体で一千品余の彩色図を所収、すべて実写のように言われたこともあるが、実際には半数近くが松平頼恭編『衆鱗手鑑』及び『衆鱗図』の転写であるのをはじめ、模写図が少なくない。どの図譜にも序跋が存在しないので、いつ頃からまとめられ始めたのかかわからないが、最晩年まで描き足されている」(p.471)のだという。
  - 10 時期からして、ブロンホフ(Jan Cock Bromhoff)と推定される。
  - 11 詳細は堀田著・鈴木編著(2006) p.178-180参照。
  - 12 ちなみに丹洲訪問の日のシーボルトの日記には「薩摩侯の側室が私の診察を求められる」との記事もある。
  - 13 鈴木(1994) p.37参照。
  - 14 欽斎は仙台藩の儒者だが、小野蘭山に本草を学んだ。甥の桜田良左(1797 ÷ 1876)は一時正敦に遊仕し、佐野城(陣屋)建設に功をなしている。『大成流兵法新論』15冊のような兵法書をはじめ、著書が多い。幕末には勤王家として知られた。
  - 15 長岡(2000)によれば、仙台北魚蟲譜には収録されていないが、その原本の一つ『博物館蟲譜』中の「タイマイ」の図には「堀田文庫」の印影があるものがある由。
  - 16 栗本丹洲は文政四年(1821)に法印に叙せられ、瑞仙院と名乗っているが、丹洲『魚蟲譜』の丹洲の名に位が付されたものはすべて「法眼」となっている。したがってこれが仙台藩に送付されたのは文政4年以前のことだと推定できる。
  - 17 天保12年(1841)の弘賢の死によって未完に終わったため、伝本は『古今要覧稿』と呼ばれる。
  - 18 この事実は、東京国立博物館蔵『本草図説』に挟み込まれた、「本草図説御一覽之事」と題した、文政4年5月1日付の書簡状の紙片から具体的に確認できる。
  - 19 東京国立博物館蔵書 和156 78-73
  - 20 山草部の「黄連一種 蝦夷之産」、「山慈姑一種 蝦夷之産」、湿草部の「悪実一種おろしやごぼう」、「王不留行」、「車前子」、「虎杖一種 蝦夷産」、毒草部の「烏頭(シヨロク)」である。
  - 21 当時の虫類は必ずしも昆虫に限らない。『本草綱目』の分類に従い、小動物全般を含むものであった。
  - 22 この書は稿本が失われている。写本ごとに巻数が異なるので、「海老同穴」の項目名のみを示す。ちなみにカイロウドウケツ(通常は「偕老同穴」と記される)を、丹洲はシャコが作った巣であると解釈しているが、実際にはカイメン(六放海綿綱または合胞体亜門に分類される)の一種であり、その円筒状の二酸化ケイ素のガラス質の美しい骨格が置物などの装飾品として用いられている。この生物には15000年ほどの寿命があるという。英名は Venus' flower basket。胃腔内に、幼生時代に腔内に取り込まれたまま成長したドウケツエビというエビがそのまま成長して閉じ込められ、その後雌雄に分化することがあるので、このエビをカイロウドウケツすなわち偕老同穴と呼んでいたことがある。丹洲の誤解はこれに起因するものであろう。丹洲は海老同穴の字を

あてている。

- 23 『千蟲譜』所収の「孫太郎虫」は熊本侯細川重賢の『昆虫胥化図』を経由した敷き写しであり、佐竹曙山編『佐竹曙山写生帖』にも敷き写しされている（内山 1995 p.64 参照）。平賀鳩溪（源内）は『物類品隋』卷之三末尾の蝦夷地の植物「イケマ」の項で「予一日讃侯ノ邸に在テ仙台侯所蔵本草図画ヲ見ル其種品千ニ近シ写生ノ妙逼真」と述べた。讃岐侯細川重賢には仙台侯から多数の博物図が伝わっていたらしい。
- 24 前編 5 卷安永 2 年（1773）、後編 4 卷安永 8 年、三編 6 卷享和元年（1801）刊。
- 25 正統『雪華図説』の意義については鈴木（1997）参照。